

# 一心寺かわら版

第一号 平成十六年三月発行

## 「他力に生きる人は精一杯やっても

おかげさまがでる」(豊島学由師)

今年の青年会の柱掛け法語のことばです。今回はこのことばを味わってみたいと思います。

まず「他力」という語ですが、よく「他力本願」ともいわれま  
す。これは一般に、「物ごとをする時、自分は努力しないで他人の  
助力をまつこと」(小学館、新撰国語辞典)と理解されているよう  
です。しかし、先にあげた意味はこの辞書では2番目に書かれて  
あり、一番目には「阿弥陀如来の力により成仏することをねがう  
こと」というほぼ本来の意味が載っていました。他力とは阿弥陀  
仏の本願力のことなのです。

では他力に生きるとはどういうことでしょうか。それは阿弥陀  
仏の願いを聞いて生きるということです。阿弥陀仏は私たちを迷  
い苦しんでいる存在と捉えて、念仏するものを救うと願い誓われ  
ています。仏さまから見れば私たちは迷っているのです。

かみどころじゅうすけさんという方の詩にこういうものがあ

ります。

「借りた傘も雨が上がったら邪魔、金をもったら古びた女房も邪魔、所帯を持ったたら親さえも邪魔。・・・(中略)・・・上を見ては不平不満、隣をながめては愚痴ばかり、何で自分を見つめないのか静かに考えてみるがええ、いったい自分でなんやろう。親のおかげ、先生のおかげ、世間さまのおかげ、おかげの塊が自分やないか。いくら長う生きても、幸せのど真ん中にいても、おかげさまが見えなけりゃ一生不幸」



耳が痛いですが私の姿はこの通りのように思います。おかげさ  
まが見えないということは真実が見えていないということであ  
り、迷っている姿です。ありがたいと喜ぶことのない人生は不幸  
ですね。しかし私は他と比べることによってしか自分を見つめる  
ことができず、自身ではその姿に気付くことができません。  
自分は精一杯頑張っているのだと慢心し、それに対して見返り  
を求めて、それが満たされなかつたら腹を立ててしまいます。そ  
ういう私を真実の世界、浄土へと救い取って下さるのが阿弥陀仏  
です。その光に照らされて、これだけ精一杯わが身を尽くすこと  
ができたのは、はかりしれないはたらきによって支えられていた  
からだ気付かされるのです。

去年ある野球選手のインタビューを聞きました。彼は学生時代無名の選手だったのですが、努力の甲斐あってかプロ野球チームのエースになりました。腰の具合のせいで調子が悪い日も多いのですが、彼は「もう選手生命が終わってもいいから毎試合全力投球したいんだ。好きな野球をここまでやってこれたのだから、ここで力尽きても悔いはない」と話していました。彼は一流のピッチャーになるために大変な努力をしたでしょうが、自らの力だけでここまで来たのではない、今まで「おかげさま」で野球選手として生かされてきたのだと気付いているからこそ、「悔いはない」という心境になれるのではないのでしょうか。

私はもちろんのこと、私を育ててくれた親も先生も世間さまもすべて阿弥陀仏に願われて、その慈悲の中わが身を尽くさせていただいているのです。ですから真宗門徒は日々阿弥陀仏に「おかげさま」と手を合わせてきたのでしょうか。他力あってこそ私の私のです。

阿弥陀仏の本願を聞いてわが身の真実に気付き、生きていることも、浄土に往生し仏となることもおかげさまであった、「南無阿弥陀仏」とお念仏して生きていくことが「他力に生きる人」であり、「おかげさまがでる」真実に生きる人なのです。



智慧の光明はかりなし 有量の諸相ことごとく  
光暎かぶらぬものはなし 真実明に帰命せよ

〔浄土和讃〕